

遙かなヨーロッパ

柴田俊治



朝日新聞社

柴田俊治（しばた としはる）

1931年（昭和6年）大阪市生まれ。京都大学文学部卒。1953年（昭和28年）朝日新聞社入社。社会部員，外報部員，サイゴン，パリ，ロンドン各特派員，外報部長を経て，現在，東京本社編集局次長。著書「アジア，そこにいる僕ら」（1971年，朝日新聞社刊），「日本人と国際人」（1978年，ダイヤモンド社刊）

遙かなヨーロッパ

昭和56年2月20日 第1刷発行

定価 330 円

昭和56年3月20日 第2刷発行

著 者 柴田俊治

発行者 初山有恒

印刷製本 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地5-3-2

電話 03(545)0131（代表）

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替 東京0-1730

0195-260238-0042 ©TOSHIHARU SHIBATA 1981

廻かなヨーロッパ

柴田俊治

朝日新聞社

表紙・扉 伊藤 鑛治

目次

I

パリ東駅	11
おおシャンゼリゼ	15
バラを着た坊さん	20
サラダのカゴ	25
キツツキと愛情	30
秋の女たち	35
編集長とネコ	39
シュザンヌ	44
霧	49
旅悠々	54

II

「口をあけろ」

魚のシッポ

駅前番頭

ワインの味

ぼられる

花 束

お茶と冠詞

宝石箱

ハーレー街

ループルのチンチン

III

あおいトマト

63

68

73

78

83

88

93

98

102

107

115

三びきの子ブタ

遊学生

C'est la vie

サマースクール

水が流れる

お忙しいでしょうが

寛容について

Permissive

◎○△×

IV

白 夜

バッキンガムの三輪車

湖と泥炭

東西ドイツ人

イタリア共産党	185
バカンスの国	190
貝	194
大使との対話	199
ロンドンの紅白	204
港の……	208
V	
どうぞテラスで	217
あとがき	231

遙かなヨーロッパ

いちど旅に出はじめたら、
いつの日、どういうふうに帰れるのか、
だれにもわからない。

——セリーヌ

パリ東駅

パリの国鉄終着駅のひとつに、東駅（ガール・ド・レスト）がある。

南仏方面へ列車のするのはリヨン駅、英仏海峡地方へはサン・ラザール駅、ブルターニュ方面へはモンパルナス駅とそれぞれに分かれているが、これらの駅前が、レストランやホテルや商店街で盛り場らしい華やかさにあふれているのに比べて、東駅の前は、なにかくすんで、わびしい。

駅前だからホテルはあるのだが、いかにも場末じみている。昔の厩舎を改造したレストランが近くにある。パリの終着駅が、鉄道が通じる以前には乗合馬車の発着場があったところにくたことを示すもので、このレストランは評判がいいが、ほかには足のむく店がない。どうしてこの駅前は暗いのだろう、と思っていた。

偶然に、フランス人の話のなかから、ヒントがみつかった。

「第一次、第二次の両大戦に、ドイツ戦線へ送られる兵士は、東駅から出ていった。悲しい別

れがあの駅のプラットホームであった。遺体や負傷兵が着いたのもあの駅だった。いまでも、東駅にはなんとなく行きたくない気分がバリのひとびとのなかにあるんだ。」

ぼくは、品川駅を思った。あの駅には、日本人の戦争の記憶がまつわりついている。品川の手側の駅前には、いまでも国鉄の主要駅にしてはわびしい。

カジノ・ド・パリでみたジジ・ジャンメールのレビューに、兵士を送る駅頭の情景があった。ジジが歌う。背景の列車が兵士を満載して動いていく。あれは、東駅だったんだな、とそのときはじめて分かった。

ランブイエ会議の取材応援にいったとき、西ドイツからバリ行きの列車に乗って、東駅に降りた。秋の冷たい雨の日だった。時間をみると、支局へ行くにはやや早い。ながいあいだ散髪をしていないのを思いだして、駅前を歩いてみた。横道に床屋の看板があった。ガラス戸ごしにのぞくと、白いうわっぱりの主人がひとりでコーヒーをのんでいた。客はなかったのですぐに椅子にすわった。

「お前さん、バリの住人じゃないな。」

「そう。ロンドンにいる。どうして分かる？」

「ここじゃこんな刈り方をしないよ。」

「ロンドンといったって、床屋はほとんどイタリア人だ。」

「そうだろう。いまはイタ公がヨーロッパ中で髪の毛をバシバシ切っている。天下の悲劇だ。」

「天下の悲劇とは大げさだな。バリモードをもっとひろめればいいじゃない？」

「そうもいくまい。世の中には流れというものがあってな。国連をみる。これも天下の悲劇だ。アラブ人がいばりすぎている……」

なにごとにも一家言ある、いかにもバリの下町の職人らしい床屋だったが、そのうちレザークットで上の方をやりはじめた。ぼくは、髪をあまり短くしないでくれ、このくらいで適当だと思うから、と頼んだ。とたんに、おじさん自信たっぷりの口調で講釈をはじめた。

「なに、これくらいで適当だと。お前さんは間違ってる。お前さんの髪は、ほれ、このあたりから薄くなりはじめている。脱毛があるのだ。脱毛を防ぐいちばんいい方法は、髪をできるだけ短く刈ることだ。」

「ほう、短くすると髪は脱げないのか？」

「そう、わたしにまかせなさい。このくらいに刈る。するといまの濃さは保てる。信じていいよ。」
ぼくはなにげなくおじさんをみた。なんと、このおじさん、頭はツルツルではないか。一本一草なく、ユル・プリンナーみたいに光っている。ぼくは内心おかしくなった。

「いまの脱毛防止法だけど、あなた自身には成功しなかったらしいね。」

床屋はカミソリを持つ手をとめた。

「おれのことか。これはおれのせいじゃない。おれの頭は、くろぐろ、ふさふさしてたんだ。証拠をみせてやろう。」

鉄や櫛をしまつてある戸棚をコトコトいわせて取り出したのは、数枚の古ぼけた写真だった。戦車を背景に、五人のフランス兵が立っている。これが自分だ、とおじさんが指さす兵士は、なるほど豊かな頭髪だった。あらためておじさんをみる。ひたいから下は、若々しさこそ失われているが、写真の青年戦車兵の面影がある。

つぎの一枚。ここにも鉄兜を小わきに抱えた黒髪の兵士がいた。

床屋はふちのすり切れた写真を、大事そうにもとの戸棚にしまつて、話をつづけた。

独仏開戦とほとんど同時に、彼は召集され、三カ月の訓練期間のち、戦車兵としてドイツ戦線に送られた。フランス軍が国境を越えたばかりのところ、ドイツ軍の進撃はあまりに早く、退路をたたれて、彼の大隊は全員捕虜になった。以来、連合軍がドイツになだれこむまで、彼は四年間の収容所生活を送る。

「毎日、毎日、ジャガイモのスープだね。ある日、飯盒のふたに顔をうつしてみたら、こんな頭になってたんだ。」

床屋は、さあ散髪をやろう、とうながした。ぼくは黙って、鏡の方をむいた。髪の毛をそり落とす音が、冷えた空気の中でしばらくつづいた。

「よし、これでもう髪は落ちないよ。お前さんもロンドンなんかで散髪しないで、髪がのびたらまた来てくれよ。」

椅子から立ち上がってから、ぼくは聞きたいことがひとつ残っているような気がした。

「ドイツから、どうして帰ってきた？」

「東駅に着いたのさ。古い話だ。だけど、おれはあれからずっとここにいます。引退するまでここにいますよ。」

次の日も、雨はやまなかった。パリ郊外のランブイエ城で、アメリカとヨーロッパの首脳にわが三木首相も加わって会議が開かれたので、報道陣は大忙しだった。西ドイツからはシュミット首相がヘリコプターで飛んできて、ジスカールデスタン仏大統領と並んで西側先進国の団結ぶりを誇示した。いまヨーロッパに戦争はない。東駅から戦線に出ていく兵士ももういない。あのとき首脳たちがどんな宣言を発したのか、ぼくはもうおぼろにしか覚えていない。だが、ランブイエ城にはらはらと散ってやまなかったマロニエの落葉と、その前の日にパリ東駅前の床屋がみせてくれた古い写真だけは、ふしぎな重みでぼくの心に沈みこんでいる。

おおシャンゼリゼ

これがバリだといえる看板通りといわれると、月並みだがやはりシャンゼリゼになる。